

浅野孝雄「フリーマン理論による唯識の解釈」への応答

大和昌平（東京基督教大学）2014年11月15日

1-1. 仏教の本質が縁起(pratītya-samutpād)として見事に捉えられている。

すべてのものは何かに縁って起っているということ。

縁起を相対性理論と訳したロシアの仏教学者チェルバッキー。

relativity

1-2. 仏教の合理性・科学との相性

「因果律についてフリーマンは…第3は…『because』という語を含んだ文脈において用いられ、『循環的因果性』、すなわち『関係性 relationality』を意味する。この『関係性』とは、科学的・統一的世界観に立脚して、事物間の関係がどこまでも合理的に究明され得るような関係性である。」(10頁)

ブッダは「無記 avyākṛta」といって、当時のインドで盛んになされていた形而上学をあえて論じなかった。

世界は無限か有限か、生命と身体は同一か別個か、修行完成者は死後も存続するか存続しないか？

人間の感覚で捉えられることに議論を限定した哲学。そういう意味で現象学。

現象は刹那滅を繰り返すプロセスであり、そのすべてに原因・結果の縁起性がある。

1-3. 仏教は実体論批判

「諸行無常」とは、現象世界は生成を繰り返しており、常住普遍なる実体(substance)は存在しない。

「諸法無我」とは、現象世界に実体概念としての「我 Ātman」は存在しない。

仏教は徹底した実体論批判として、インドの実体論との論争の中で展開する。

1-4. 縁起説の展開

二種縁起 あるものがあるから苦しみがあり、それがなくなれば苦しみはなくなる。

「およそ苦しみが生ずるのは、すべて潜在的形成力(行)を縁(原因)として起こるのである。諸々の潜在的形成力が消滅するならば、もはや苦しみの生ずることもない。」(『ブッダのことば』Sutta Nipāta 731)

渴愛縁起としての五支縁起

老死(苦しみ)－生(誕生)－有(迷いの生存)－取(執着)－愛(渴愛・愛着)

よって、愛着する欲望を消滅させれば、苦しみは無くなると考える。

認識論としての五支縁起

受(感受)－触(接触)－六処(眼耳鼻舌身意の認識器官)－名色(外界の個物)－識(意識・識別作用)

識(意識)と名色(外界の個物)と六処(認識器官のいずれか)が触(接触)すると受(感覚)が生じる。

十二支縁起は渴愛縁起＋認識論＋二支(行と無明)という重複分類

老死は愛着から生ずるとする渴愛縁起に認識論の五支をつなぎ、行(潜在的形成力)と無明を足した。

老死(苦しみ)は無明(迷い)から生ずるとし、無明を破る知恵が苦しみを無くすと意味づけた。

仏教を「知恵による救い」をもたらす宗教とみなすこともできる。

三世両重の因果は、説一切有部によって縁起説が実体論的に把握されたもの。

過去世の因(無明・行)が現在世の果(識・名色・六処・受)を生み、現在世の因(取・有)が未来世の果(生・老死)を生むと三世にわたって因果が重なっているとする。

現象世界は刹那滅を繰り返す無常だが、過去現在未来には実体はあるとし、実体論に傾いた。

大乘仏教の先駆けとなった般若経 (prajñāpāramitā sutra) は縁起説を再提示した。

知恵 (智慧) の教え

中心概念の空 (śūnyatā) は、縁起説 (相対性) 説の再提示、仏教の原点回帰であった。

1-5. ゴンブリッジの十二支縁起解釈の新しさ

古ヴェーダの宇宙生成論を含意するものとして無明を捉える。

ヴェーダ詩人にとっては、知ることが存在することであった。

無明に非存在・非有という意味を見る。

非存在＝混沌・カオスが、行すなわち欲望・志向性を生み、行が欲求や志向として識に上るとする。

2-1. キリスト教神学者ジョン・カブによる仏教の縁起説への応答

John Cobb, Jr. BEYOND DIALOGUE

延原時行訳『対話を超えて：キリスト教と仏教の相互変革の展望』(行路社、1985 年)

ホワイトヘッド (Alfred Whitehead) のプロセス哲学の神学的展開としてのプロセス神学

世界を一連の生起 (occasion、これを彼は「現実的存在」actual entity あるいは「現実的生起」actual occasion と称する) つまり、過程として捉える。

「仏教的分析は、実体的自己の幻想を解体する。それは、客体 (対象) 群を離れていかなる主体もなく、主体を離れていかなる客体もないことを、示す。主体は、客体群の合成合体であり、客体群は、ただこの合成合体においてだけ現存在する。世界に対抗してそれ自身において現存在する自己というようなものの存在する余地はない。…われわれの聖書的遺産は、ギリシア哲学の影響を受けて聖書を読む際われわれが知らぬあいだに採用している、はるかに静態的で実体的な諸範疇によって晦まされている。最近の西洋哲学は、全般的に見て、実体論的思惟様態とは袂をわち、いままでのいかなる時よりも仏教的思惟様態とずっと相性がよい。」

(ジョン・カブ『対話を超えて』188-189 頁)

「キリスト教的目標はしたがって、個人人格的自己の解体ではなくして、つねに新しい神の目的に即応合致することによって自己が過去を不断に超越することである。」(同 194 頁)

3-1. 聖書は人間を全体として様々な側面から見ているか。

קַיָּן(カイン)－πνεῦμα (プニューマ) : 霊・風・息

神との関係において息づく関係的存在としての人間。

בָּשָׂר(ハサル)－σάρξ(サルクス) : 肉

弱い存在としての人間、身体的・精神的の両方の意味で使われる。

נֶפֶשׁ(ネフシュ)－ψυχή (プシュケー) : 生き物、いのち、魂。

生命をもつ生き物としての人間、あるいはその魂。

לֵב(レブ)－καρδιά(カルディヤ) : 心、人間存在の中心

存在の中心において神の語りかけに応答するものとしての人間。